

土づくりによる気象変動に強い稲づくり

●高温障害対策(ケイ酸質資材の使用)

気象変動に対応する土づくりは、作柄だけでなく品質低下の軽減にも繋がります。ケイ酸質資材の使用は稲の根を活性化させ、昨年的高温下においても、整粒歩合の向上や、未熟粒の低下、胴割れ粒、着色粒の軽減などといった品質向上への効果が確認されています。



基本技術励行による収量・品質の安定化

●安定収量確保

近年の気象変動のなかで高品質米の安定生産を図るためには、計画的な作業技術に基づき、適期移植を基本として、健苗の育成、適切な栽植密度、植え付け本数の確保、活着を促進させる水管理を行います。また、中干しや深水管理を適切に実施することによる無効分げつの抑制、幼穂形成・減数分裂期での栄養診断に基づく追肥を行います。田植え好適日は、県中央部では「あきたこまち」の場合5月20～25日頃です。

●飽水管理

近年、水田の大規模化や高温による地域内での節水対策や、前年のわらが高温によって異常還元して“根の活力”が低下することで、収量や品質に大きく影響を及ぼしています。異常還元を回避して土壌を酸化的に保つには、田面を湿潤状態に保つ「飽水管理」が有効です。「飽水管理」を継続して根の活力を維持し、極端な葉色の低下と有機物の分解を促進させましょう。

方法

入水し2～3cmほど水を張り、自然に減水して表面が見えてきたら入水します(繰り返し)。

土壌を湿潤状態に保って還元(ワキ)を回避しながら、土中に酸素を供給させます。

- 田面にヒビが入らない程度とし、乾かしすぎない。
- 出穂期は大量の水が必要となるため、3cm程の湛水管理とする。
- 田面が柔らかすぎないように、土壌条件を考慮して実施する。

●カメムシ類対策(水田内対策と草刈り・薬剤防除の徹底)

異常気象の影響などにより、水田内への除草剤の適期散布が行われず、水田内にホタルイやカヤツリグサ、ノビエなどの雑草の発生が目立つ圃場が増加しています。除草効果を高めるためにも、除草剤の選択および散布時期、漏水対策や水田の均平を図る必要があります。また、本田防除では出穂期以降2回防除の徹底が重要です。

< 薬剤防除の効果を高めるには >

- 野立て看板を参考とした適期防除に努める。
- 各地域においての一斉防除を基本とする。

除草剤の散布は代掻きからの逆算が重要となります。代掻き後に雑草が動き始めるため、初期剤は代掻きから7日以内に、一発除草剤のみであれば10日以内と、できるだけ日数を空けすぎずに散布できる作業体制に努めましょう。

6月上旬から稲が出穂する10～15日前までに草刈りを数回行い、また、農耕地用除草剤(バスタ、ラウンドアップなど)で対策しましょう。8月は出穂期7～10日後頃とその後の基本2回薬剤散布します。直前の草刈りは避け、事情により草刈りする場合は薬剤散布後とし、その後に草刈りを行う際は稲の収穫2週間前以降に行います(9月上旬頃より)。

大豆



▲10月13日(金) 潟上市天王

播種作業はおおむね平年並に進み、出芽も順調に推移しましたが、7月に発生した大雨による被害やその後の高温によって、着莢数の減少や紫斑病粒の発生などといった品質の低下が生じました。刈り取り期においても長雨が続き、天候に留意しながら刈り取り作業が行われましたが、気象災害や高温の影響を払拭できず、例年より大幅に数量が減少し、粒形は中粒傾向が多く見受けられました。

次年度に向けて、排水対策や中耕・培土作業などの基本作業の徹底に加えて、温暖化に向けた管理方法や追加資材の検討を図っていきます。